



「お茶の水地理」という雑誌

田宮 兵衛

Wikipedia には、「お茶の水地理」という項目は無いので、本誌がお茶の水地理学会機関誌、1959年創刊年1回刊行ということも、お茶の水地理学会がお茶の水女子大学文教育学部地理学科の同窓会誌から継続していることも一般には分からない。

同窓会誌の「誌」とは雑誌、定期刊行物のことである。刊行には主体がいる。主体が個人であろうが団体であろうが、刊行を定期的に継続することは思いつきでできることはない。「お茶の水地理」の場合はお茶の水地理学会が刊行の責任を負っている。

責任は、経済的責任と実務的責任に分けられる。前者は、刊行に要する経費である。同会の収入源は会員の会費である。本誌の場合、特殊な形態の販売の売り上げもあるが、特殊な形態ゆえのある種の拘束もある。実務的責任とは、原稿作成（募集）、編集・校正、印刷発注、配布・販売の責任である。お茶の水地理学会という組織は、この二つの責任を負っているのである。

以下の議論はこれらのうち、原稿作成・編集に限る。集まった原稿を雑誌の形で印刷することを、小説など文芸作品で行えば、同人雑誌と呼ばれる印刷物になる。「お茶の水地理」の印刷・刊行物としての構造は同人雑誌と全く同じである。この点、学会を名乗っている様々な学術団体が刊行している学会誌も実は同人雑誌である。

さて、お茶の水地理「学会」の「学会」とは何かであろうか。研究者が集まって自らが決めた学術活動を行う学術団体は、その名称に学術活動の内容を表す学問分野名に「会」を付すことが多い。学問分野名が「学」で終わると必然的に学術団体の名称には「学会」があたかも接尾語であるかのように付く。ただし、語尾に「学会」が付いてい

る団体がすべて学術団体ではないことは言うまでもない。

学術団体の定期刊行物が学術雑誌であり、学会誌という呼び方もされる。学会誌に掲載されている文章は論文という体裁をとり、学術論文ということになる。学術論文は学会誌を刊行する学術団体がカバーする学術分野における新知見・新発見を含まなければならない、このことをオリジナリティがあるという。外国の学術論文に essay という語が題名に付されていることがある。日本の国語教育ではエッセーを「随筆」と言い換えることが多いが、新知見に焦点を絞る短い論文も essay である。学位請求論文など大部の長編学術論文を thesis と呼ぶことに対する語である。学会誌にはページ数の制限があるので、学術論文は基本的に essay でしかあり得ない。ただし、日本語でエッセー・随筆と言った場合学術論文を指すことはない。学位請求論文はさすがに博士の場合は、まだ thesis という表現でもおかしくない。学士の場合は 50 年前にはすでに、essay であった。当時は随筆が卒論（学士論文）に混入することを如何に防ぐかが大学教員の役目の一つであったが、大分以前から、その舞台は修士論文に移った。

Thesis は一般に長いので印刷物にした時書籍の体裁をとることが多い。印刷物作成能力が低い時代、多数の閲読が可能な形態である印刷物になる thesis は、書籍にならない thesis より優れている、という判断基準が、ある時点で出来上がった。すると、本という体裁がとれただけで優れているという思い込みが発生した。今や人類の印刷能力は大幅に向上したので、本の刊行が出版社の問題であった時代は終わり、売れない本の刊行は本を作りたい人がその気になるかどうかの問題となっている。同様な構造が、英語以外の言語で論文を書

くと英語よりランクが下がるという問題にもあるらしいが、詳細は省略する。

学会誌の価値は、掲載されている essey(論文)の価値による。論文の価値の判定は難しい。このところ基準になっているのはインパクトポイントである。被引用数に関わるらしい。同一業界であれば、この基準はある程度有効であるが、ユニバーサルに通用する基準とはなれないことは明らかである。論文の価値は本来読者が見いだす必要がある。専門教育とは読者教育といっても過言ではない。しかし、専門教育を終えていない専門家希望者もいるので、学会誌に掲載される論文は一定のレベルをクリアしていることが要求される。また、掲載される論文に誤りがあることを避けなければならない。これらのことと、学会誌に論文を掲載する権利は学会の構成員すべて同等であることを、学会誌を刊行する学会は両立させる必要がある。それを支える制度が査読制度である。学会の構成員のうちから編集を委任された人々が構成する編集委員会の外に査読者(レフェリー)を置く。査読者は内容を含め論文の誤りを指摘する。論文の執筆者は修正等によりそれに対応する。査読者は、当該学術団体の構成員(学会員)がボランティアで務めることが普通である。一般に、執筆者が所属する研究機関と同一機関に所属する構成員、また同じ教育機関出身の構成員は避けられる。学会誌として認定される前提として査読制度の確立があり、適切な査読制度がなければ一般に学会誌とは認められない。したがって、同窓会誌的性格があれば、学会誌とは認められない。日本学術会議が、会員の選出母体を学術団体とする現在の形にリフォームされた時、学術団体の資格には、同窓会ではないことが含まれていた。

査読を通過した論文が当該学会誌を刊行する学術団体の最低レベルをクリアしたことは、客観的事実であるが、それ以外の価値は読者が判断しなければならないことは変わっていない。その上、当該学会誌の最低レベルがどのようなレベルであ

るかを判定することも読者に要請される時代になった。

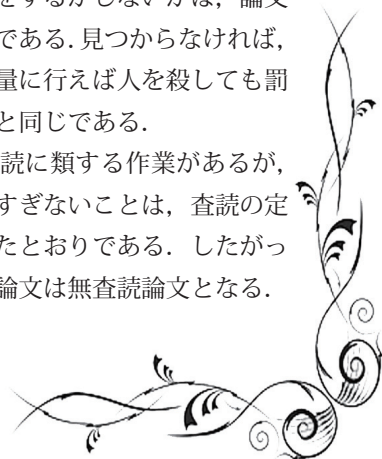
なお、誤字・脱字、執筆に関する規定違反の訂正・修正、また印刷技術上の問題は編集委員会の責任になるので、査読の対象は専門的記述の適否である。新知見・新発見を目指して作成された論文であるので、正誤の判定は重要であり、困難性を伴う。さらに、もし学問観など思想的領域に踏み込めば査読は検閲にもなる可能性がある。ただし、自然科学領域ではその危険性は少ない。

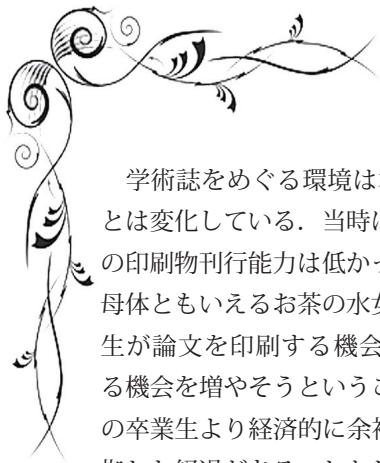
現在、学会誌に掲載される学術論文の数は増加している。人類の印刷能力の増大の結果でもあるが、査読つき論文への需要が増大している現実の反映である。需要が増大しているのは、査読付き論文である。この需要を満たすために印刷物の頁数が増えるには、学会誌の数が増大する必要がある。同一学術団体が複数の学会誌を刊行するか、学会誌を刊行する学術団体の数が増えるのかが必要になる。単なる増頁も含めすべてのことが起きている。

こうなった原因は、査読付きの論文の数が研究能力の指標であり、研究能力があれば教育能力もあるという先入観にある。それらの能力が十分あれば、大学院や大学という高等教育機関で教員になれる可能性が高まる。ここで、「十分」という定性的副詞を用いたが、唯一の客観的基準が査読付き論文の数という曖昧な代物なのでやむを得ない。問題はこれが、思い込みに過ぎないことである。

この思い込みは、無査読論文の手抜きに直結することが多い。手抜きをするかしないかは、論文執筆者の生き方の問題である。見つからなければ、あるいは正々堂々と大量に行えば人を殺しても罰せられないという現実と同じである。

本誌は編集段階で査読に類する作業があるが、あくまで編集の補助にすぎないことは、査読の定義等に関わり述べてきたとおりである。したがって、本誌に掲載される論文は無査読論文となる。





学術誌をめぐる環境は本誌創刊当時の 50 年前とは変化している。当時はまだ人類ないしは日本の印刷物刊行能力は低かった。そこで、本学会の母体ともいえるお茶の水女子大学地理学科の卒業生が論文を印刷する機会、活版印刷物を作成する機会を増やそうということで、卒業したばかりの卒業生より経済的に余裕のある OG に負担を依頼した経過がある。しかし、教育者という名の研究者としての就職には査読なき論文の意味は急速に低下する。筆者が本誌にかかわりを持ち始めた 20 年前に、そのことを遠回しに指摘したが、通じなかった。近年大学人が査読つき論文の数という条件をクリアした人々ばかりになったので、状況は遠回しも近回しも関係なくなった。

本誌の存在意義、すなわち学会誌の体裁をとった同窓会誌の意義は、これまで述べてきた学会誌・学術論文をめぐる現状を認識した上で価値のある論文を掲載することであろう。相当なレベルの読

者の存在を信じることになる。そして、それが続くかどうかは、編集を担当する人々のエネルギーと学会の財政負担能力（特殊な販売の売り上げ増も含む）両者ともに許すことが前提である。

特殊な販売とは、本誌にお茶の水女子大学文教育学部地理学教室（地理学科はとうの昔に無くなった）の定期刊行物という役割も課されていることである。こういうことが起こるのも、旧帝国大学の 1 学科が定期刊行物を発行し、それらが全国的学会誌に変化していったという歴史的事実が存在するからであろう。その結果、印刷物を定期的に刊行できることが一つのステータス・シンボルになった。これは、先入観というよりある種の偏見である。

たみや・ひょうえ

本学名誉教授

平成帝京大学教授